庭師 十川(そごう) 憂樹氏

〝庭師〟がキャンプ場を造っている――この夏、そんな怪情報をゲットした濃人取材班(俺だけ)は、コロナ対策を万全にして木更津の里山へ急行！
不安と不安を胸に抱いて踏み込んだ里山の中にいたのは十川憂樹という漢。
教師、詐欺師、医師、殺陣師…数ある〝師〟の中にあって、ひと際ミステリアスな〝庭師〟をさらにミステリアスな存在にする漢の過去と未来に耳を傾けよ！

Profile

長らく花の世界の裏舞台で暗躍(笑)してきたが、今年からは「庭師・十川」として本格的に表舞台での活動を開始。広い経験と深い知識、そして研ぎ澄まされた感覚で“あなたの庭”をプロデュース！
▼「庭師・十川」「SOTONO花屋」各種お問い合わせ
niwasisogou@gmail.com

――いきなりなんですが〝庭師〟って何ですか？

諸説諸々あるのですが、京都の〝石屋〟がそのルーツと言われています。茶の文化に欠かせなかった「茶室」の庭を露地(ろじ)と言うのですが、それを造っていたのが石屋であったと。

――お茶の文化と結びついていたとは！で、庭師である十川さんはどんな仕事をされているんですか？

植木や石とかの配置を考えながら「きれいな庭を造る」というのは間違いではないのですが、僕の場合は時間的な概念も含め、もっと手掛けている範囲が広いと思います。依頼主さんとどんな庭にしたいのかをきちんと話して、最終的には依頼主さんご自身で庭を造り上げてもらえるよう〝方向付け〟をするようなイメージですね。

――奥が深いですね。何でこのディープな世界に？

草木が好きだった祖母の影響で十代の頃から盆栽が好きでして。

――渋いティーンですね

その頃は草木に詳しいことがイケてると思っていたんです(笑)。

――イケてないですね(笑)

そんな若者だったので、当時はとにかく故郷の香川を出たかったんです。そのために24時間バイトみたいな生活をしばらく続けて貯めたお金を握りしめ東京へ向かったんですね。そして、成田空港まで行けばアメリカに行けるもんだと思ってたんです。若かったから。

――若いにもほどがありますね(笑)。なかなか〝庭〟にたどり着かない…

実際に「庭」の世界に足を踏み入れたのは、東京で高名な師匠に弟子入りしてからですね。そこで好きにやらせてもらっているうちに、大好きな植物について本気で勉強したくなって、本来6年は修行を積まなければいけないと言われているところをバリバリやって3年で「庭」から卒業して、それから「花」の世界に入ったんです。

造るのは「生きる」を学ぶ場

――花!?

はい。これは強くお伝えしておきたいんですけど、僕、花を愛でる気持ちが本当に強いんですよ。

――似合わないですねぇ(←とても失礼)

花の世界って、町のお花屋さんとかで女性の販売員さんがいるイメージがあると思うんですけど、そうじゃない花の世界…例えば〝デザイン〟とか〝プロデュース〟みたいな仕事は男性の方がずっと多くて、しかも平均年齢も高いんです。そんな世界に当時の僕みたいな若いのが入ったものだから、最初からお客様にはすごく重宝してもらったんですね。そんなある日、バイクで事故を起こして大ケガしちゃいまして…。

――好事魔多しってやつですね。

それで師匠のところに戻って一年間、心身ともにリハビリさせてもらった後、世間一般で言うところの〝フラワーアーティスト〟としてリスタートしました。僕の名前を表に出すことはほとんどありませんでしたが、いろんな作品やプロジェクトに関わって、ビジネスとしてもすごく上手くいってたんです。自分でも〝植物家〟って名乗ってたりして…その頃は何だかフワフワした空間に身を浸していましたね。でも、それも東日本大震災で全てが変わったんです。ビジネスパートナーも飛んじゃったりして(笑)。

――好事魔多しですね…って二回目ですよ。笑ってる場合じゃない。

実際、大変な時期はありましたが、その後、子ども向けの里山体験事業を市原市で開催するようになって、毎週末アクアラインを渡って千葉に定期的に来るようになったんです。

――アメリカ渡航未遂からついに千葉まで来た！

里山体験事業はとてもご好評をいただいてたのですが、少し前に一区切りつけて。これからは木更津を拠点に「庭師」を前面に出してやっていくことにしたんです。最初は農園を開くつもりだったんですが、地主さんから「悪いけどこの土地、中国人に売っちゃったから出て行ってくれ」って、オープン1ヶ月前に退去要請受けまして(笑)。

◆公園以上…

――純粋にひでぇ話ですね。

それから、その地主さんに「こないだは悪かったね」って紹介されたのが、この場所なんです。それでこの8月からこの場所の開拓を始めました。

――本当に開拓してますね…ってすごい最近の話じゃないですか。

そうなんです(笑)。まだまだ始まってもいないような状態なのですが、すでにキャンプに来てくれたご家族も何組かいまして。これからいろいろと手を入れていかなきゃいけないので、毎日ここで作業してます。

――庭師・十川さんなりのキャンプ場の未来図はもう見えているんですか？

「公園以上、キャンプ場以上。」って感じですかね。〝未満〟じゃなくて(ニッコリ)。あまり馴染みがないかもしれませんが、世界には「カッティングフラワー」という文化がありまして。これは公園に咲いている花をカットして持って帰ることができるんですね。それをここでやりたいんですよ。〝庭師〟で〝花屋〟である僕が造る里山キャンプ場なので。

――おぉ！なんだか面白いことになりそう！ここでも「里山」はキーワードなんですね。

里山には人間の「生きる」があると思うんです。その先にある「森」は、本来、人が入れない、立ち入ってはいけない場所なんですね。だから、里山って人間が生きる「際」なんです。

――里山で知らず知らずのうちに生きる力を試されているんですね。

これまで里山体験事業では子どもたちにたくさん自然と触れ合ってもらうべく、虫とかをどんどん触らせてきましたけど、僕自身は実は虫が苦手でして…虫は…無理ですね(笑)。

――まさかの虫二ガ手！？それでもなんとかなるってことか(笑)。深く楽しいお話、ありがとうございました！

――何かを始めることにためらいなんかありゃしない。一見、無茶苦茶。しかし、そこにはいつも強い信念と緻密な思慮が張り巡らされている。そんな庭師のいろんな思いが込められた濃いキャンプ場って…全然未満じゃないぜ！ROCK!!